

編集委員 森玉康宏

あ・ん

ぼろぼろの写真

大正生まれの母方の祖父はきちょうめんな性格で、机の上は常に整理されていた。

引き出しに、ぼろぼろの写真が入っていた。かすかに人の顔とおぼしきものが写っている。若い妻と幼い娘、私の祖母と母である。

元は上半身ぐらいは写っていたのかもしれない。だが、もう小さな紙片になってしまい、ビニール袋に入れられていた。

写真とともに、召集された祖父は太平洋戦争の戦地を転戦した。中国大陸から南太平洋へ。妻と娘の写真を見ながら、何を思っただろう。ぼろぼろになったのは、軍服のポケットに入っていたからなのか、それとも何度も手でなでたからなのか。

定年退職して従軍記を書いたが、ラバウルなどの地名が記された行動記録とわずかな感想のみだった。亡くなるまでに何度か戦時中のことを尋ねたものの、ほとんど語らなかった。

「みんな死んでしまった」。

それでおしまいだった。戦後、マリアアにかかって生死の縁をさまよった。妻を結核で亡くし、娘を連れて再婚した。この頃の話となると、全く語らなかつた。そしていろんなことを胸に秘め、世を去った。

編集委員会で担当する「昭和のアルバム」のページでは、月1回、読者から投稿があった写真を掲載する。8月は戦争の写真の特集する。今年には内地から戦地へと送られた家族の写真を中心に選んだ。写るのは、妻や子どもたちである。

なのに、その向こうに写真を手にする兵士の姿が浮かんで見える気がする。うずくまって、じっと写真を見つめている。

ぼんやり浮かぶその横顔に、祖父の面影が重なる。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

① 筆者のおじいさんが戦地に持っていった写真には、誰が写っていましたか？

③ この記事を読んで、どのようなことを思ったり考えたりしましたか？感想を書きましょう。

② 筆者は、その写真がぼろぼろになってしまった理由をどのように記していますか？

名前【 】